



Celia



in

Realworld

じゅしん

リアリストに魔法のキス

あまりに地に足が着いていないような奴とは話したくない。
つい先程言われた言葉を頭の中で反芻する。

「私、浮いてないわ」

腰に手を当てて憤慨のポーズ。彼はやれやれと首を振った。

「そういう意味じゃない」
「じゃあどういう意味よ。私が現実逃避でもしてるって言うの？」
「否定できるのか？」
「できるわ。それはあなたがよくわかっているはずよ」

憤慨のポーズのまま顔を覗き込むと、彼は軽く舌打ちした。あまり近付かないでくれ。

深い深い海のような色の髪に、空を詰め込んだビー玉のような瞳。それはとてもきれいで、燃える紅葉のような赤毛の私にはとてもうらやましい。だけど、その瞳にさえ映ればたちまち私も美しいものの仲間入り。だって紅葉は、空に映えるものの代表格だもの。

「ねえ、魔法はある。その主張のどこがしっかりしてないっていうの？」
「君は証明できるのか？」
「じゃあ、あなたはなにを証明できるの？ ないことを証明することの方が難しいわ。それなら、あるって思った方が楽しいじゃない」
「…現実を見ようともせずになんか楽しいんだ」
「あ、待ってよ」

彼はすたすたと歩き出してしまった。たたた、と私が追いかける。すたすた、たたた。乾いたパーカッションでリズムを取る。

「ふふふ」
「何かおかしいんだ」

こちらを見もせず、彼は言う。さっきは話したくないとか言ったくせに話しかけてくれるんだからとても優しい。

「あのね、あなた、私のこと好きなんじゃないかしら」
「はあ？ 逆だろ」
「私があなを？うふふ、どうかしら」

わざとらしく微笑むと、彼は豆鉄砲を食らった鳩のような顔をした。

+++

吹き抜ける風に、マフラーを巻きつけ直した。

視界の端で揺れるのは隣を歩く同期生の、夕焼け色の髪の毛だ。大学に入学してすぐに仲良くなったのが彼女だった。明るく気が利く、友達が多いタイプ。俺はその友達のうちの一人というわけだ。

「ふふふっ」
「何かおかしいんだ」

彼女は幸せそうに笑う。何がそんなに幸せなのかはわからない。

「あのね、あなた、私のこと好きなんじゃないかしら」
「はあ？ 逆だろ」
「私があなを？うふふ、どうかしら」

彼女はぐるりと回った。スカートがふんわりと広がる。そしてそのスカートはゆっくりと元の形に戻った。

どうかしら、って、何だよ。

いつもの彼女なら、そうよ、って返すところだ。まさか本当に俺のことは何でもないのか？

「……………」

思っていた以上に、ショックだ。

「……………」

「あら、本気にした？」

くすくす笑う彼女が、とても小憎たらしい。

+++

社交ダンスのようにくるりと回ると、彼は私を横目で見た。ねえ、ほら。一人では回れるのよ。あなたは回らない。そう映るかしら？

「……………」

彼はやれやれと額を押さえた。本気にしたのかしら。私が彼を好きだというのは誰が見ても明白なはずなのに。神様だっけってきつとそう言うわ。私は何でも知っているけど、これに関しては見ればわかる、ってね。

彼の空色の瞳が曇った。こんな顔もするなんて、初めての発見だわ。

「あら、本気にした？」

くすくす笑うと、彼はイライラとした視線を隠しもせずはこちらに向けた。それはまるで大きな鍋でぐらぐら熱湯が沸くよう。

「君が俺を好きじゃないなら、一緒にいる理由がない」

「大した自信ね。そういうとこ、好きよ」

「だが、俺は違う。一緒にいるのは君がついてくるからだ」

「あなたが私についてきてるんじゃないの」

彼の顔を捕まえて、視線を合わせる。空の色を詰め込んだ瞳が、驚いたまま私を見つめる。言いたいことは大体わかるわ。あまり近付かないでくれ、でしょう？

「魔法のキスをあげるわ。あなたは私が好きになる」

「は」

抗議しようと口を開いた彼と、がちっと歯がぶつかった。

リアリストに魔法のキス 2

さて、二人して唇に怪我しているのを見て俺の自慢の友人達は見なかったふりをしたのに対し、彼女の友人達はぎゃーぎゃーと騒ぎ立てた。挙げ句俺はキスが下手くそというレッテルを貼られたわけだがそれは置いておこう。彼女達に本当に下手かどうか披露する気はないし、どう思われようが関係はない。問題は彼女だ。「違うの、私が下手なのよ」？ キスが事実だと肯定してどうする。何も言わなければ偶然同じところに怪我したで済んだものを。大体、あんなのノーカウントだ。

「どうしたの？ えらく不機嫌ね」

「近寄るな」

「あら、もう誰も私と仲良くても茶化したりしないわよ」

「勘違いはされてるだろ」

「勘違い？ 何のことかしら」

お前と俺が付き合ってると思われることだよ！まさか、そう返したら違うの？とか何とか答える気か？
彼女はいつの間に距離を詰めたのか俺の額を指でつついた。

「考えごと？」

「あ！ れ！ は!!」

「？」

「事故だ」

「事故？ ……ええ、歯がぶつかるなんて思わなかったわ」

彼女が腕を組んで眉をひそめる。

本当にひどい事故だわ、と口を尖らせる。

「違う！ 俺と君は友達だろ」

「あら、おかしいわね。私のこと好きじゃなかったの？」

「そんなこと一言も言っていない」

「そうだった？」

彼女との会話はいつもこうだ。的を射ない。だからイライラする。彼女にはまったく伝わらないが。

「ねえ、じゃあなんで私に期待させるのよ」

「期待？」

「こうして手を引いたり、平気で二人っきりになったり……。私、すごくドキドキしてるんだから」

「……は？」

とりあえず手を振りほどいて思案する。俺が二人っきりの状況を作ってるわけか。それが期待させている、と。いや待て。何故俺がそんな状況を作らなければならない？ これは罠だ。甘く密やかに仕掛けられた彼女の罠。

「わかってるんだ。君は俺を嵌めようとしている」

「なぜ？ 意味がないわ」

「騙されないぞ」

「ええ、賢いあなたを私が騙せると思う？」

わかってるんだ。君の方が賢いことくらい。だけど君も同じくらい見抜いてる。俺がそれを認めないこと。

恐ろしい女。賢い女。見ていたくなるのも事実。

彼女とにらみあっていると、彼女小さくため息をついた。

「無理しなくていいわ」

彼女はそっと一歩下がった。

「そうね、少し暗示をかけたわ。ちょっとだけ、私は特別なんだって思ったの。だから…。…言い訳にはならないわね。無理矢理キスしてごめんさい」

「……やっぱり」

賢い女だ。見抜いてたんだ。

だから、彼女は俺に彼女の友達を近付けようとしなかったし、ただの『少女』であろうとした。

「ねえ、私が怖い？」

「…少なくとも、君は」

怖くない。

必要以上に近付いても吐き気はしない。それは元からだった。汚いことを何も知らないような綺麗な、小さな女の子だと思ったから。……これじゃあまるで俺がロリコンだな。

だけど彼女がとても熱い情熱を胸に秘めているとわかってても、駆け引き上手な成人女性だとわかってても、その手を掴めたのは彼女だからだ。吐き気もしなかった。

「……克服は、全然できてなくて……」

「ええ」

「俺は君のこと、女だと思ってないのかもしれない」

「私はそれでもいいわ」

「……でも、君のことが好きなのかもしれない」

唇が乾いて仕方ないのでべろりと舐めると、彼女に噛まれたところがぷっくりと腫れている。

「無理しなくていいわ」

「無理はしてない」

「言ったからね？」

「二言はない」

「私、あなたを好きな女として近付いていい？」

「君、全然隠せてなかったよ」

そうだ。いつもの彼女だ。女とかそうじゃないとか、そんな括りじゃない。大学に入って最初に声をかけてくれた、俺の大切な友人。

「嬉しいわ！ 1年の頃からずっと好きだったんだから!! 長い片思いよ!!」

いつの間に距離を詰めたのか、彼女は俺をぎゅっと強い力で抱き締めている。燃えるような赤毛を掬えば、ふわふわのそれは彼女の感情を体現するかのごとく揺れた。

世界は無機質で色がない。それを変えたのはこの嫌でも目に入る赤毛で。女は恐ろしい生き物。その思い込みを変えたのは、小さな愛しい俺の友人。

彼女は顔を輝かせて、俺の嫌いな非現実的なことを平気で言う。

「魔法はあるじゃない！ 魔法のキスで王子様の呪いが解けたわ!!」

恋を失った私にジャスミンを

ぐじゅぐじゅと鼻をすすると目の前の友人はとても嫌そうな顔をした。

「いい加減泣きやんでくれないと俺が泣かせてみたいじゃないか」
「別に……置いていってもいいのよ」
「それじゃあもっと外聞が悪いだろう」

涙で深い深い海のような色の髪がまた滲む。どうしてかしら。街は色鮮やかで世界はきれいなのに、どうして滲んでいくのかしら。

「君、なんで街中なんかに出てきたんだよ。人が多いのに」

確かに外は人が多い。泣いたまま街中に出た私を、彼はこのひっそりと佇む喫茶店に案内した。初めて来たそこは別世界のように静かで、私が鼻水をすする音がとても目立った。

「私の家じゃ、嫌でしょ。恋人でもないのに」

そういうところに潔癖なのは、半年ほどの付き合いでよくわかった。問題は、彼が少し女性不審なところ。私は子供っぽい言動と押しの強さで友人という立場を獲得しているけれど、部屋は間違いなく「女」を感じさせてしまう。そもそも朝急いで学校に行く準備をしたせいで下着が落ちている。女の子の友達にだって見られない。

せっかく、泣いていた私を泣きやませようとあの手この手を尽くしてくれているのに。

「落ち着いたか？」
「うん、ありがとう。正直意外だわ、あなたが慰めてくれるなんて」
「そりゃあ、君は友達じゃないか」
「ええ。でも、ごめんなさいね？怒らないでね？」
「はっきり話してくれ」
「あなたには放置されると思ったから」

だから、別に歩いてくるあなたを見ても隠れなかったのに。
またぐじゅっと啜りあげると、彼は綺麗な顔を少ししかめる。

「君は他の女の子達にあれこれ問い詰められたくないんだろう？」
「……ええ」
「君の友達が悪い子ばかりだとは思わないがそういう配慮には欠ける気がしたものでね」
「優しいのね」

不器用だけど。

「とにかく、泣きたかったのよ。世界の一部が崩れたようだったわ。あの人に嫌いって言われただけで。なんていう悲劇なのかしら」
「ああ」
「あなたが静かに聞いてくれて、とても嬉しいのよ。入学当初はあんなにうざったそうにしてたのに。今なら私の友人の一人として堂々と紹介できるわ」
「君のおかげで友人が増えて嬉しいよ」

友人、と。形容されるのがとても嬉しい。彼の中の女性は母親と私、それとその他なんじゃないかと思う。人を好きになったことあるのかしら。いつか聞いてみたい。必要がなかった、なんて言いそうね。

どうしてかしら。意外と優しい一面を見つけたからかしら。彼のことももっと知りたい。

ああ、でも。あの人のこともこうして好きになったんだ。とてもとても好きだったのに、ひどく独りよがりな恋だった。

「うっ……う……」
「おいおい、また泣くのか？」
「な、泣いてない……」

彼が、私が手を付けなかったコーヒーを飲んでしまって立ちあがる。自分の荷物と私の荷物を一気に持ち上げる。

「泣きたいなら、どこか、もっと思いっきり泣けるところに行こう。ここなら人目も気にならないと思ったんだが、気を使わせてしまったようだ」

「う、うん……」

さっと会計を済まされて、とぼとぼ彼についていく。

「飲みにも行くか？ 盛り上がりたい？ 相対性理論について語りたい？」

「……気持ちは嬉しいんだけど……その、あんまり知られたくなくて……」

「わかった、俺の家でたくさん泣けばいい。酒、用意しとくから……そうだな、午後六時半くらいに大学の正門で待っていてくれ」

「ありがとう」

彼のことだから、完璧な人選と完璧な準備で出迎えてくれるのだろう。

そうして一旦別れて、私はまた泣いた。今度は、彼の優しさが嬉しくて。

+++

とくとくとくと……とお酒が並々注がれていく。

二人でカフェも初めてだったのに、二人で宅飲みなんて誰ともしたことない。彼は言葉通りいろんなお酒とおつまみを用意していて、タオルも傍に置いてあった。

本当にただの友達なのね。私だってもう少し異性だと意識するのに。

「あ、ちょっと待って」

「？」

彼が透明なお酒の上に白い花を浮かべる。

「洗ったから安心してくれ」

「可愛い花ね。あ……この香り、ジャスミン？」

「そう。以前見た花言葉の〈愛の通夜〉っていうのが印象的だったから」

「愛の通夜……か」

本当に、マニアックな知識が豊富なんだから反応に困る。

透明なお酒に浮かんだジャスミンがたゆたうのを見て、私はたぶん、今日初めて笑った。彼がこんなにロマンチストだなんてね。

「この想いを埋葬して、勉強に精を出さなきゃね」

「そうだな」

ジャスミンの花言葉の〈愛の通夜〉はとてもマイナー。

「あなたが友達でよかった」

用意してあるものを摘まんで、彼のグラスにもジャスミンを浮かべる。

そうね、差し詰めここで込めるジャスミンの花言葉は、〈あなたについていきます〉。

コーヒーの甘さ

コーヒーの甘さは、とろけるほど。

コーヒーよりも紅茶を好む私がコーヒーを味わうのは、もっぱら彼の唇の味だ。だけど彼はそれをとても嫌がる。

私と彼は、本当に付き合っているのかしら。恋人という表現は、正しいのかしら。

彼に初めて「近付かないでくれ」と言われなかった日から、変わったことといえば並んで歩く距離が少し近くなったことくらい。後は、そうね、名前を呼んでくれるようになったわ。でも、それだけ。

「……」

「……」

「それ以上無理矢理されると吐く気がする」

「あまり吐くと歯がボロボロになるわよ」

彼のお腹の上に跨がって、両腕を床に押さえ込んで顔を覗き込む。その状態で暫く睨み合った末の、ギブアップ宣言がこれだった。

恋人である(と認めてはいるらしい)私の顔を近付けたら吐きそうなんて冗談じゃないわ。ちょっとキスしようとしただけなのに。

「……セリア。本当に」

「ごめんなさい。不安になるのは嫌だからこの際聞いわね」

「？」

彼の瞳の中で私の燃えるような紅葉色の髪の毛が揺れる。押さえつけた手は、振りほどこうと思えば振り解けるはずなのに、それをしないのは何故なのかしら。わからないのよ、この人の考えてることが。

「今日、女の子と話してたのを見たの」

「俺が？」

「ええ。私だけだと思ってたの、あなたが話せる女の子なんて。違ったのね」

「いや、正しいよ。俺は君以外の女の子とは目も合わせられない」

見たのよ。私よりもずっとずっと女の子らしい女の子と、笑いながら話しているところ。

言葉が詰まって、うまく出てこない。泣いてもどうにもならないのに、焦って涙が出てくる。涙が出てきたらうまく声が出せなくなる。悪循環だわ。

「セリア、順を追って話してくれないか？いつ、どこで、どういう風に？」

「3限目と4限目の間に、ね。私は、実験室に行って」

「俺はたぶん、ゼミの授業に向かう途中かな」

「いいえ、売店の方に、女の子と、歩いてたわ。それで、楽しそうに」

「売店？ ああ、わかったよ」

彼が不意に腹筋を使って起き上がるので、私はお腹から振り落とされて床に転がった。

「あ、悪い」

「冷たいのね」

「今日は怒ってばかりだな」

「クリス？」

「はいはい」

彼が私を引っ張り起こして引き寄せ、携帯電話を私に見えるように操作する。データボックスを開くと、私が見た女の子の後姿が画面いっぱいに現れた。ロリータファッションにわざとらしいほどのブロンド。間違いない。

「これ、レックスだよ。罰ゲーム」

彼の操作で次の写真が現れる。上半身裸で、下はスカートをはいて写真を撮るのを止めようとしている写真。確かに、共通の友人だった。携帯電話を渡されて、よく見てみる。どう見てもレックスで、綺麗に脱毛までしていた。

「……………わ、私より可愛いなんてありえないわ」

「安心した？」

「……ええ、ごめんなさい。ちょっと、取り乱したわ」

「俺の世界には君と君以外しか女の子はいないのに」

彼がぼそつと言って、照れくさそうに傍を離れる。

彼の携帯電話を取り落としそうになって、慌ててベッドに放り投げた。

「クリストファー！」

「何」

後ろからぎゅっと抱きしめると、彼は苦しいと言だけ言って、気にしない様子でコーヒーマーカーの電源を入れる。

「機嫌直った？」

「元々機嫌は悪くないわ」

「嘘つけ。君のマジギレ久しぶりに見たぞ」

コポツ、コポツと音を立ててコーヒーマーカーの香りが広がる。甘くてクールな、彼の香り。キスが苦いと文句を言えば、たくさん砂糖を入れてくれたんだ。

「ねえ、クリストファー」

「何？」

「魔法のキスをちょうだい。私が、あなたを疑わなくなるように」

「何だよ、まだ疑う気だったのか？」

文句を言いつつ、彼は私を抱き上げた。嫌がって暴れるのも気にせずリビングへ連れて行かれ、私はゆっくりソファに着地した。

「ついでに、自由を奪う形でキスしなくなるようにもしてほしいな」

ソファの隅に追い詰められて、私がしたように両手を掴んで固定される。

「これ、けっこう怖いだろ？」

「あら残念。あなたなら怖くないのよ」

「言ってくれるね」

初めて彼からしてくれたキスはとても優しく、とても熱かった。本当に怖くはなくて、初めてのキスが勢いだった分、初めてのキスみたいにドキドキしたの。

ああほら、クリスのコーヒーマーカーくらい甘い時間だわ。

恋の泡

「足を得る代わりに声を失うなんて、フェアな取引とは思えないわ」

「そうか？」

「そうよ。おまけに足は針山の上を歩いてるように痛むなんて」

子供向けの薄く古びた童話を太股の上に置いて、彼女はひどい話だわ、と言った。二人でソファに座っているが、彼女は隣にいる俺を背もたれにして足を伸ばしていた。ソファからはみ出した足をぶらぶら揺らしているのだろう、反動で重くはないが決して軽くもない体重が俺にのしかかってくる。

「君はヒロインが幸せになれば満足なのか？」

「違うわ。だけど、フェアな取引をすべきよ。声を奪うなら、文字がわかっていなきゃ意志の疎通もできないもの」

「どうだろう。人魚姫の魔女は悪い魔女じゃなかったか？結ばれることが無理なように仕組んでる」

「……そうね。身分の違いが一番のテーマなもの」

後ろに少し体をずらしてみると、彼女は小さく悲鳴を上げて俺の足の上に倒れてきた。

「いじわる！」

「そうかな」

「ふん、あなたが謝罪するまで意地でも起き上がらないわ」

頬を膨らませて、彼女は俺を睨みつける。

「おでこが丸見えだ」

「えっち！」

最近気付いたのだが、額が広いのを気にしているらしい。彼女は額に前髪を撫でつけてまた頬を膨らませて抗議を示す。その目が言っているのはさあ謝罪しなさいってところだろうか。

「身分違いがテーマね」

彼女の手から『人魚姫』を取り上げる。細い指が追いかけてきたけれど、途中で諦めて胸の上で手を組んだ。

「アンデルセンは、階級が低くて好きな人を諦めなければならなかったんですって。だから、人魚姫はアンデルセン自身なのよ」

「ふーん」

ばらばらと本を開くと、単語に付箋が貼ってあり、暗喩や暗示が書きこまれている。

おそらく文学部か教育学部にでも友達がいる、付箋でべたべたのこれを面白がってその友達に借りたのだろう。

見ていると頭が痛くなるので本を閉じてセリアの手の中に戻す。

えーっと、何の話だったか……。思い出すより話題を変えようと、少し思考を巡らせる。人魚姫。悲恋の話。

「……俺が王子様で君が人魚姫なら、物語はきっとハッピーエンドだったのに」

「あら、素敵なお話を言うじゃない」

「もし君が声を奪われても、君が考えてることならわかるよ」

「本当？」

「ああ。今は『そろそろ起き上がらないと首が痛いわ』って思ってる」

「いいえ、クリストファーはロリコンって思ったわ」

「言ってはならないことを」

前髪を額から払うと、彼女は額を押さえながら真顔で言った。

「そこは君が恋人だから違うって否定するところでしょ」

これはマズイ。俺がロリコンなのが真実で彼女が童顔だと言外に言ったようなものだった。彼女はそれを額の広さ以上に気にしてるのに。ついでに俺はロリコンじゃない。

背中を丸めて、彼女の耳元で小さく謝罪の言葉を口にする。と、彼女は勝ち誇った顔で起き上がって俺の隣に座りなおした。

「そうだ、最近覚えたカクテルを作ろうか。飲む？」

「ええ」

キッチンへ行って、カクテルを作る。本当はチェリーをのせると綺麗なコントラストになるのだが、まあ今日はなくても仕方ない。

セリアが熱心に、何度目かわからない『人魚姫』に目を通してている。

テーブルの上にグラスを置くと、ゆっくり顔を上げた。

「あら、綺麗なブルー」

「だろう？ 今日の君にぴったりだ」

「この泡は人魚姫なのね」

バスケットに個包装のチョコレートをひっくり返して、彼女の隣に座る。

「あなたの瞳の色ね。とっても綺麗」

グラスの底から揺らめいて浮き上がる泡は、まるで何も無いところから沸き上がってくる、彼女を愛しいと思う気持ちのようで。